

## 木造深山正虎坐像 —車僧の伝承と清水隆慶研究の現状—

山下 絵美

### 1. はじめに

平成30年(2018)3月30日付で京都市指定有形文化財となった木造深山正虎坐像(市川車僧保存会所有)は、制作年代について、これまで南北朝時代が有力とされてきたが、近年の調査により、江戸時代前期に活躍した仏師・初代清水隆慶の制作であることが明らかになった。本稿では、像主である深山正虎について知り得た史料を整理するとともに、近年新たな作例が報告され、その造像活動が知られつつある歴代清水隆慶研究の現状と作例を確認し、本像から見える隆慶の造像活動についてふれてみたい。

文中の引用史料の旧字・異体字は、通常字体に改めたが、不明の文字はそのまま表記した。割書きは〔 〕内に示した。読み下しについては適宜句読点を付した。

### 2. これまでの深山正虎像

像主である深山正虎(生没年不詳)は、鎌倉時代の禅僧である。この名に聞き馴染みがなくとも、「車僧」のことだといえはわかる方もあるかもしれない。車僧は、謡曲「車僧」で知られ、法力をあやつる僧として現在に語り継がれている。

木造深山正虎坐像は、通常非公開である

ため、これまでほとんど取り上げられることはなかった。大正8年(1919)に京都府から発行された『京都府史蹟勝地調査報告 第一冊』には、地域の伝承とともに像の写真が掲載されている。美術工芸品の分野では、『京都の肖像彫刻』(財団法人京都府文化財保護基金発行)<sup>1)</sup>刊行に際する昭和50年代実施の調査後に新たな報告はなく、ほかは近世地誌類や地名辞典の類で本像の記述が見られるのみである。また、深山正虎の肖像は、絵画・彫刻のいずれにおいても、現在のところ本像が知られるのみである。

### 3. 史料にみる「深山正虎」と「海生寺」

木造深山正虎坐像は、京都市右京区太秦海正寺町に所在する「車僧影堂」[図1]と呼ばれる小堂に安置され、地元の有志からなる保存会により維持・管理がはかられてきた。平成28年(2016)より京都国立博



〔図1〕車僧影堂 京都市文化財保護課撮影



ノミナルベシ。像ハ足利初期ノ彫刻ト認メラル。木碑記スル所ノ建武ノ年ト近キモノナラン。

ここには、像の詳細とともに、土地の人々は小堂に安置する木像を「くるまぞう」と呼びならわしていること<sup>4)</sup>、5月5日を命日としていること、建武元年(1334)銘の木造位牌があることから、室町時代の彫刻作品と目されていたことがわかる<sup>5)</sup>。

深山正虎の事績についても、存命していたであろう時代まで遡ることのできる史料を見出すことができず、近世以降の記録に頼らざるを得ない。『雍州府志』(天和2年―貞享3年〈1682―1686〉)には「海生寺」と「車僧深山正虎塔」の項があり<sup>6)</sup>、以下のように記される<sup>7)</sup>。読み下しは筆者により、白文は註6に掲載。

「海生寺」太秦の里の南、市川村に在り。開基の僧、詳らかならず。本尊は観音にして、曾て深山和尚これに住す。この僧、始め名字を称せず、また、何れの許の人と云ふことを知らず。常に破車に乗り、四衢の辺に在り。道の旁らの小竪(竪)、その欲する所に随いて、これを推し、これを輓く。里人名づけて破れ車と曰ふ。或は語るに七百歳の事を以てす。しかして自ら歴試する所を謂ふ。これに因りて、また七百歳と呼ぶ。南禅寺直翁侃に謁して大悟す。則ち剃髪して僧となる。深山、諱は正虎と号す。菴を山階山中に結ぶ。然して後にこの寺に移りて、遷化す。則ち遺像あり。相伝ふ、この像

は村人、筑紫より携へ来るなりと。今、黄檗派の僧、これを守る。

「車僧深山正虎塔」太秦の郷七村の内、市川村海生寺に在り。

以上、『雍州府志』によると、海生寺は観音菩薩を本尊とし、深山和尚が住んでいたが、はじめは何者か知れず、常に破車(壊れた車)を子どもたちに押し輓きさせて辺りを往来していた。それを人は破車、あるいは七百年前のことを昔語りすることから七百歳とも呼んだ。東福寺開山・円爾(聖一国師)の法嗣である直翁智侃(寛元3年―元亨2年〈1245―1322〉)に謁えて僧となり、深山正虎と号した。山科に庵を結び、後に海生寺に移り遷化した。遺像は筑紫から到来したと村人は伝え、今は黄檗僧がこれを守る、という。またここには塔、すなわち墓があるという。これが現在広く知られる海生寺ならびに深山正虎の情報で、その後の地誌類は、基本的にはこの内容が引き継がれる<sup>8)</sup>。

また、『雍州府志』以前の史料としては、『太秦海生寺深山正虎行状』(成立年不詳)<sup>9)</sup>・『延宝伝灯録』(延宝6年〈1678〉)<sup>10)</sup>・『嵯峨行程』(延宝8年〈1680〉)<sup>11)</sup>等が挙げられる。『太秦海生寺深山正虎行状』(以下、『行状』)については、『延宝伝灯録』とほぼ同内容であること、『雍州府志』に一部が引用されていることから、これに近い時期、あるいはそれ以前の成立と考えられる。

『太秦海生寺深山正虎行状』(読み下しは筆者により、白文は註9に掲載。)

師、名氏を称せず。また何れの州人とも知らず。常に破車に乗り、四衢の道に在り。道傍の小豎(豎)、その欲する所に随い、推々(之)輓々(之)。里人これを名づけて破車と曰う。或は語るに七百歳の事を以て自ら歴試して曰う。これに因りてまた七百歳と呼ぶ。烏(烏)窠の風を慕う。一夏筑の管崎の松樹の上にて坐禅す。夏了りて特に行き直翁侃に謁す。侃問う、聞くに汝今夏樹の上に修禅す、是なりや否やと。師云く、是なりと。侃云く、如何なるかこれ樹上の禅と。師云く、上なり下なりと。時に楹上の蟻、行きて上下す。侃指して曰く、這うもまたよく坐禅すと。師これに頷(頷)く。侃使(便)趕出して、後に剃髪して僧となる。諱は正虎、字は深山。庵を山階の山中に結び。毎に光蔵の塔と往来す。自ら時菓を持して木像に供える。臨終の前十日、光蔵に来る。木像を礼辞しておわんぬ。謂固遊名無心曰。端午の日を以て入山して逝く。詣一衆を携え来たりて医我矣。期に臨みて石行かんと欲す。衆みな曰く、風狂之言信ずるべからずと。終に行かず。故に石また行くこと遅し。師三回門を出てこれを待つ。日三(巳)に巾(中)を過ぐ。乃ち罵<sup>のしつ</sup>て言く、同門の出入、宿世冤家、吾が約に違いて言来らざるのみと。便ち袈裟を披し、草鞋を著し、拄杖を拈して坐す。持掲怡然として化す。預けて庵後に於いて喪地を占めて、自ら薪を積むこと籠の如し。石独り晡に及んで到る。巳に坐化するを見る。速ち人をして光蔵に告ぐ。衆来たりて即ち茶毘す。烟消え火滅し、骨灰無し。師誠に散聖の応

化なり。

師、直翁侃を嗣ぐ。侃、聖一国師を嗣ぐ。

『行状』には、直翁智侃と交わした問答や、僧となった深山正虎についてのその後が記されている。なお、直翁の法嗣としての記録については、『恵日山宗派図』<sup>12)</sup>に、直翁を祖とする「盛光門派」の一人として、「世称車僧 深山正虎」と名が連ねられている。

深山正虎は破車を乗り回し、「破車」または「車僧」と呼ばれ、茶毘に付された際には骨灰が消えてなくなるという、高僧を示唆する逸話が収められており、少なくとも江戸時代のはじめには、深山正虎は車僧と呼ばれ、奇僧としてのイメージが定着していたようだ。

#### 4. 「車僧」としての伝承

謡曲「車僧」(作者不詳)[図2]では、愛宕山の天狗・太郎坊との法力くらべを主題としている。ある雪の日、車僧(ワキ)が嵯峨野を遊行していると、そこへ山伏姿



[図2] 金剛流宗家「車僧」奈良県桜井市・大神神社  
春の大神祭 後宴能 (平成30年4月10日)  
提供：大神神社



[図3]『車僧ノ巻物』※主要部分を切り抜き  
(成立年不詳, 京都大学附属図書館所蔵)

の天狗（前シテ）が現れ問答を仕掛けるが失敗する。その後、溝越天狗と呼ばれる小天狗（アヒ）を遣わし、車僧を魔道に誘惑しようとするも払子で打ち払われて退散する。ついに太郎坊が天狗の本体（後シテ）を現して車僧に挑む。なおも車僧は泰然として動じず、太郎坊は笞で車を打つが動かない。ところが車僧が払子で虚空を払うと車は動き出す。こうして太郎坊の意のままにすることはできず、「まことに奇特の車僧かな、あら尊や恐ろしや」と合唱して消え失せた<sup>13)</sup>。以上が、「車僧」の大筋である。

また、「車僧」を視覚化した絵巻物『車僧ノ巻物』（成立年不詳, 京都大学附属図書館所蔵）も伝わる [図3]。

## 5. 木造深山正虎坐像の概要

本像 [図4～13] の概要について以下に記す。本概要は、平成26年（2014）に京都市文化財保護課が実施した調査<sup>14)</sup>により得たデータをもとに、その後の京都国立博物館でのファイバースコープ調査、エックス線CTスキャン調査の結果を加え、平成29年度京都市文化財保護審議会における諮問・答申を経て、一部改編・修正を加

えたものである。

〈法量 (cm)〉

像高 61.7	総高(頂顎—衣裾) 96.8
顎高 41.6	頂—顎 20.1
面幅 12.3	耳張 16.1
面奥 16.5	胸奥(中央) 22.3
腹奥 26.4	肘張 45.0
	膝張 51.1

〈形状〉

老相をしめす剃髪の僧形像。前頭部中央をわずかにくぼませる。額に三条の皺を刻み、その左右に血管を浮かせる。眉根を寄せ、下瞼に二条、目尻に二条の皺を刻む。法令線を顎下まで巡らせ、頬のくぼみも顎下まで達する。口角から下唇にかけて皺を刻む。鼻孔をわずかに穿ち、耳孔をわずかに彫りくぼめる。首の皺と鎖骨、肋骨を表す。

大袖の衣三枚（うち二枚は白衣と直綴か）を右衽に着け、鍔袈裟を偏袒右肩に着け、さらに左前膊に四つ折にした坐具をかける。袈裟は正面で上縁を折り返し、左前膊にかけ、鍔は円形で大きく、紐を装飾的に結ぶ。裙（直綴か）は正面左寄りですぐ右前に打ち合わせ、鬘を作る。

頭部を前方に突き出し、椅子に趺坐する。左手は第一・三・四指を捻じ、手首に数珠をかける。右手は第一・二指を捻じ、その他の指を曲げて払子の柄を握る。

〈品質・構造〉

京都国立博物館での調査で撮影されたエックス線CTスキャン画像も参考にする以下通りである。

寄木造、針葉樹材製。彩色、玉眼嵌入。

頭部と体部を別材製とする。頭部は耳前を通る線で前後二材を矧ぎ、首柄挿しとす



[図4] 木造深山正虎坐像 正面  
※図4～16は京都国立博物館提供



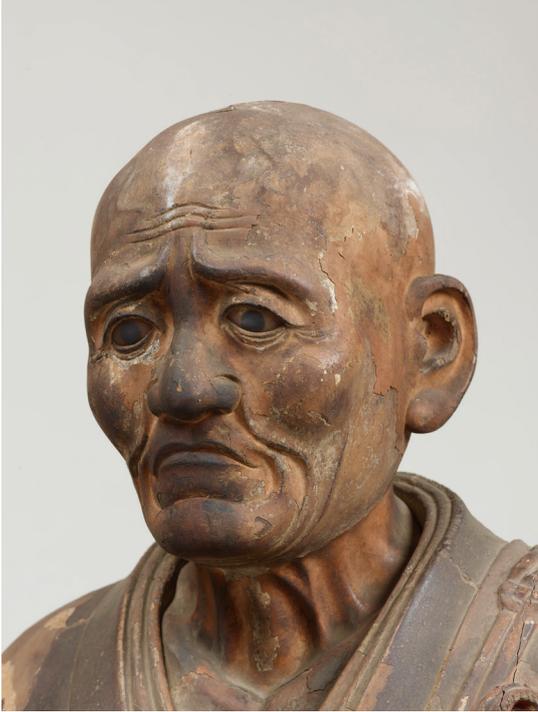
[図5] 同 左側面



[図6] 同 背面



[図7] 同 右側面



〔図8〕 同 面相部



〔図9〕 同 正面（付属品を含む）



〔図10〕 同 エックス線CTスキャン画像  
（側面より）



〔図11〕 同（上方より）

る。頭部に内削りをほどこし、玉眼を嵌入する。体幹部は前後二材製で、両体側部に各一材を矧ぎ、各材に及んで内削りをほどこす。前面材は胸部まで彫出し、内部に棚板を設け、首柄を受ける仕様とする。両脚部に横木一材、両前膊に各一材を矧ぐ。両手首は両袖口に差し込み矧ぎとする。像底開口部に前後三枚の板を張る。

表面は錆地に白色の下地を重ね、彩色をほどこす。また各所に黒漆塗りがあり、古色仕上げとみられる箇所もある。

〈保存状態〉

後補部は、左手指先、帽子、払子、数珠、椅子。右手先は現状矧ぎ目から分離。彩色と黒漆塗りは後補の可能性もあるが、ほぼ剥落し、詳細は不明。

〈銘文〉

京都国立博物館での像内調査で撮影されたファイバースコープ画像によると以下の通り。

[底板内面墨書]

深山正虎禪師造立二世安楽  
願主上月宗全  
仏工祖定朝二十六葉大仏師  
清水右近隆慶

[帽子裏 朱書]

安政六未年十一月  
再建二付新調  
払子共  
高谷

[椅子背面 墨書]

明治二十四年四月吉日  
京都西洞院綾小路

施主奥村栄徳

〈納入品〉

像内に木像の僧形頭部を納める。京都国立博物館での調査で撮影されたエックス線CTスキャン画像によれば、その頭部の構造は、両耳後ろを通る線で前後二材矧ぎ。玉眼嵌入。

以上のとおり、本像は等身よりやや小さめの、椅子に跏趺する、一般的な姿勢をとる頂相彫刻である。寄木造で玉眼を嵌入し、体幹部は前後に二材を矧ぎ、挿首としている。通常は帽子をかぶり、左手に数珠、右手に払子を執る姿で安置されている。背中を少し丸め、眉を寄せて口を結んだ、困ったような表情を浮かべるのが印象的で、皺の多く刻まれた面相、頭部に浮き出た血管、肉薄な頬や首元などには、実在の老僧を思わせる巧みな表現を見ることが出来る。裙の襷は形式的ではあるが、全体に衣文線は深く刻まれて抑揚があり、背面においては、袈裟の広がりや地付部のたまり皺まで意識が払われている。写実性に富んだ作風であることから、制作年代は没年からまもないであろう南北朝時代が有力視されてきたが、京都国立博物館でのファイバースコープ調査で像内の銘記が確認されたことにより、清水隆慶の制作であることが明らかになった<sup>15)</sup>。

底板内面の墨書は、冒頭が明確ではないが、上月宗全なる願主の二世の安楽を願い、「仏工祖定朝二十六葉大仏師 清水右近隆慶」が深山正虎禪師像を造立したことが一筆で、かつ帽子と椅子にある銘文とも異なる筆跡で記されている [図12・13]。

上月宗全が、海生寺や深山正虎とどのような関係にある人物なのかを知ることはできなかったが、隆慶はこの人物からの依頼を受け、深山正虎像を制作したと思われる。

また、挿首を抜きとり覗き込んだ像内には、僧形らしき頭頂部が確認できるものの、これまで全容を確認することができなかったが、エックス線CTスキャン調査により、僧形頭部が納入されていることが確認され、その壮年を思わせる面相や、前後二材を矧ぎ、玉眼を嵌入する構造までもが明らかになった [図10・11]。

ほか、帽子と払子は安政6年(1859)11月、おそらくは影堂の再建時に、高谷氏により新調されたこと、椅子は明治24年(1891)に、京都西洞院綾小路の奥村栄徳氏により寄進されたことが記されており、像本体の補修のみならず、影堂や持物などの再建、新調が重ねられてきたことがわかる<sup>16)</sup>。

## 6. 歴代清水隆慶とその作例

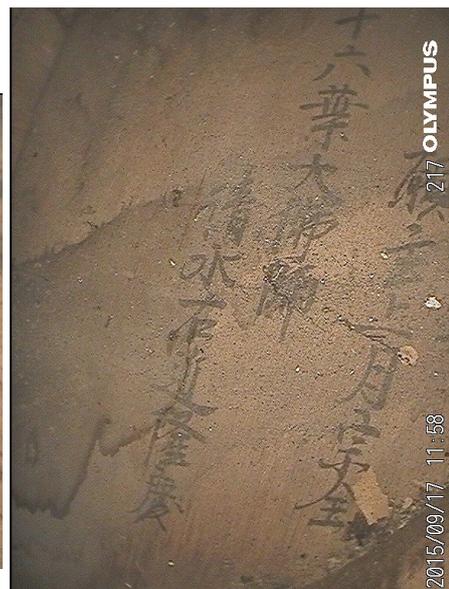
### ―深山正虎像の制作年代―

清水隆慶は、江戸時代に京都を拠点に活躍した仏師である。延享2年(1745)刊行の『改正増補 京羽二重大全 三』では、「建仁寺町松原下ル 法眼隆慶」とあり、後述の隆慶歴代作品の銘文にも「仏工京建仁寺町五条」[文末一覧表No.19(以下、表19などと示す)]・「京都建仁寺五条上ル」[表36]などとあることから、建仁寺の南側、五条通と松原通のあいだに工房を構えていたようである。杉山二郎氏による調査・研究からは、伝存作品はじめ位牌・過去帳写などの資料が見出され、作品の制作年代やその作風もあわせて、四代にわたる活動が推定された<sup>17)</sup>。

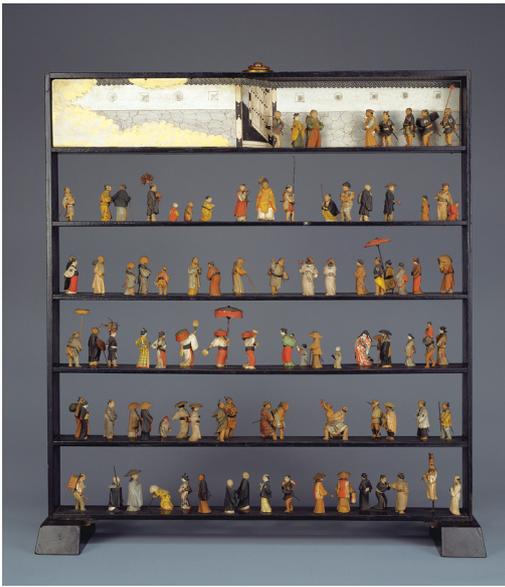
隆慶在銘作品のなかで最もよく知られるのは、街ゆく人々をいきいきとあらわした、初代隆慶(万治2年―享保17年<1659―1732>)の手になる群像作品「百



[図12] 同 底板内面墨書(部分)1



[図13] 同 底板内面墨書(部分)2



〔図14〕初代清水隆慶作「百人一衆」個人蔵

人一衆」（享保2年〈1717〉）〔表18・図14〕である<sup>18)</sup>。像高約5～6cmの、鮮やかに彩色された人形103体を6段の棚に並べている。平成20年（2008）に京都国立博物館で開催された新春特集陳列「仏師清水隆慶 ―老いらくのてんごう―」では、「百人一衆」をはじめとした作品が紹介され、その後、浅湫毅氏が新出作品について詳細を報告している<sup>19)</sup>。

また、清水隆慶の名は、奈良県生駒市の宝山寺を開いた湛海（寛永6年―享保元年〈1629―1716〉）の造像活動に関わったことにより広く知られている。奈良・華嚴宗元興寺木造不動明王坐像（元禄9年〈1696〉）には、次のような銘文がのこる。

〈光背裏面墨書〉

奉新造大聖不動明王一尊二世之求願／于時元禄九丙子年七月十八日般若窟法山律師開眼也／則本尊之図採色等律師指図也其外御手伝エ／作者京都大仏師清水隆慶造料金子五両三步也／後代当坊可為本尊

者也／東大寺上之坊／俊雅大／春秋／廿八歳

これによれば、像は湛海が図様や彩色を「京都大仏師隆慶」に指図して制作されたことがわかる。湛海に関わる作品で、隆慶とみられる人物が記された銘文は、本作が知られるのみであるが、隆慶の関与が推定される湛海作品は複数指摘されており、うち奈良・宝山寺厨子入五大明王像（元禄14年〈1701〉、重要文化財）〔表7〕などは、近世を代表する仏彫刻として評価されている。

本稿では、先行研究により隆慶の関与が推定される湛海作品、または隆慶在銘作品をあわせて一覧表にし、歴代隆慶作品の通覧を試みた。湛海作とされながらも、隆慶の制作や関与が推定されるものを全て含めると36例が確認でき、うち隆慶単独の作例は22例挙げることができた。隆慶の単独作例については、これまで湛海が没した享保元年（1716）以降にあらわれるとされてきたが<sup>20)</sup>、髑髏（元禄2〈1689〉）〔表1、図15・16〕や、竹翁坐像（宝永3―7〈1706―1710〉）などの湛海存命中の制作と思われる単独作例が確認されたことにより、湛海に関連する造像活動と並行した、隆慶独自の活動が見えてくることになる。

## 7. 深山正虎像の制作年代

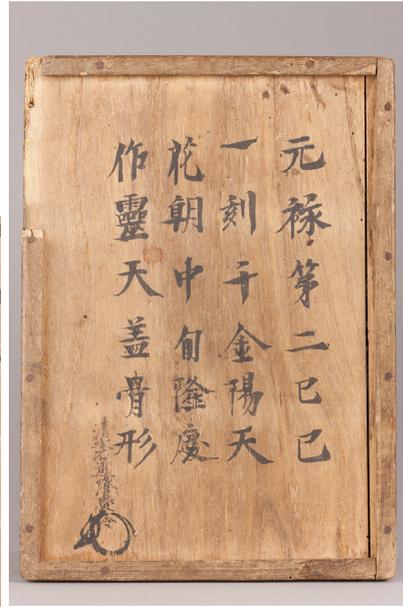
隆慶の作例は、像高30cm前後の小像が多く、江戸期における一町仏師の仕事として語られることも多いが、じつに幅広い題



[図15] 初代清水隆慶作「髑髏」個人蔵



[図16] 同 箱蓋裏墨書



材を手がけ、生気に満ちた造形に仕上げている。ただし、歴代の作例を通覧するに、また浅湫氏が指摘するように<sup>21)</sup>、とくに二代目以降と思われる作例には少々硬さが感じられ、どちらかといえば人形としての高い完成度を見るようにも思う。そのなかにあって、深山正虎像は、等身に近い大きさであり、仏像を含めた多様な作例をのこす初代隆慶に通じる作風が看取される。また、深山正虎像の銘記に見られる「右近」を名乗る作例は、前出「髑髏」の箱書のほかに確認できない現状を合わせると、正虎像は初代隆慶の制作であることが推定される。初代隆慶は、宝山寺諸仏の制作で培った確かな技術を基礎とした、柔軟な制作活動を展開していくようである。

## 8. 宝山湛海と院達・清水隆慶

湛海に關与した清水隆慶の活動について、新田義円氏は「宝山寺側には、清水隆慶が湛海の彫刻上の師匠であり且つ仏道の

上では彼の弟子であつたという伝えがあつて、現に同寺本堂にある地藏菩薩像や、開山堂の湛海像は隆慶の作とされて来た」<sup>22)</sup>と述べる一方で、「勿論これを確認すべきものはないが、この度の小林剛博士などによる湛海調査<sup>23)</sup>に際しても清水隆慶の名は、ついに見ることができなかつた」としている。田辺三郎助氏も、奈良・法隆寺西円堂木造不動明王坐像を、元興寺像および大阪・玉泉寺木造不動明王坐像と比較し、湛海・隆慶の共作であると推定したうえで、「こうしたいわば他所への注文制作には、隆慶は一切名をあらわさなかつたように思える」とする<sup>24)</sup>。ただし杉山二郎氏は、「宝山寺の文書のなかに、湛海和尚と隆慶を結びつける、年次不明の書信」について報告されている<sup>25)</sup>。

(前略)

八月十四日 重長(花押)  
 妙道律師様  
 孝仙律師様

戒幢律師様

〈追而書〉

尚々荒神尊之儀先頃／使于立慶江遣シ候  
所ニ未出来不被成候／出来次第此方江立  
慶より御座候筈ニ／御座候忝千太郎弥々  
快御座候生れ付／ひわずニ御座候間堅固  
ニ罷成候様ニ常々／御祈願奉願候以上

杉山氏は、本書が荒神尊造立に関する内容で、「立慶」がおそらく隆慶だろうと推測された。年代不明ながら、何らかの糸口となる可能性はある。

また、湛海の造像活動に関与し、作例にも確実に名をのこす仏師に院達がいる。宝山寺奥院境内の光明院本尊であった、大阪・松林寺木造不動明王坐像は、光背の陰刻銘によれば、貞享2年(1685)、中尊は湛海と「太(ママ)宮方末孫法橋院達」、二童子像を同じく院達が制作している<sup>26)</sup>。また宝山寺般若窟本尊の銅造弥勒菩薩坐像は、光背銘によれば、天和2年(1682)、「大宮方大仏師法橋院達」が制作している。前者の銘文には、院達は湛海の7歳年上で旧友とあるから、長きにわたる親交のなかで、宝山寺諸像の制作にも携わったのだろう。湛海に関する仏像彫刻は、高橋平明氏により詳しく報告されており<sup>27)</sup>、氏は宝山寺にのこる湛海作の諸仏を、湛海の閉観<sup>28)</sup>(貞享3-5年<1686-1688>、元禄元-4年<1688-1691>)を境に前・後期湛海様として分類することができ、前期には院達、後期には隆慶が関わっていることを示唆されている。また、院達から隆慶への交代については、「宝山寺中興に関係する主要な造像は、貞享2年(1685)頃まで

にほぼ一段落」していること、または院達の高齢によるものと述べられている。貞享2年段階で湛海は57歳、院達は64歳、隆慶は湛海の10歳年下と思われるので47歳であったと推定される。

また院達は、京都市内の寺院にも多くの肖像彫刻をのこす吉野右京と同一であることが長谷洋一氏により提示されている<sup>29)</sup>。吉野右京は「洛陽大宮方上之大仏師」などの肩書きがあり、藤原種久、藤原種次などとも称し、京都上京の一条室町福長町に居住していたことが、京都・妙心寺衡梅院木造雪江禅師坐像などの銘文から知られる。一方、埼玉・密蔵院十二神将像のうち、院達が制作した丑神将像の左足柄墨書銘に「洛陽大宮方上之／大仏師右京入道／法橋院達作／上京室町福長町／居住／延宝八年／申三月吉日」とあり、院達もまた右京を名乗り、□一条室町福長町に居住していることがわかる。京都・真如寺木造高德院坐像にも「洛陽大宮方之正統上之大仏師右京／法橋院達」との銘記があるとされることから、吉野右京と院達が同一である可能性は高い。

では、院達と清水隆慶にはどのような関係があったのであろうか。京都を離れ、湛海のもとで造像活動に従事した両者を結びつける史料や作品は、現在のところ確認されておらず、あるいは師弟関係があるとすれば、両者の現存作例を検討していく必要があり、今後の課題としたい。

## 9. 深山正虎像および歴代清水隆慶作品における課題

エックス線CTスキャン画像により判明した、深山正虎像に納入された頭部像は、頭頂を尖らせたような独特の内割り面が互いに共通することから、正虎像と同時に制作されたと思われる。また、顔立ちは正虎像とはちがい壮年の相を示しており、正虎像とは挿首の仕口も異なるようで、納入の意図は不明である。像内に別の頭部が納入された例としては、京都・建仁寺西来院の木造蘭溪道隆坐像の内部に、蘭溪道隆とみられる古い頭部が納入されていることが挙げられる。これは、当初像の頭部を再興像に納入したことが推測されるが、果たして正虎像もそうであろうか。上月宗全なる願主、あるいは安楽を願う二世を模刻した頭部などとも考えられるが想像の域を出ない。いかなる理由で鎌倉時代の禅僧の肖像彫刻がこの時期に制作されたのか、願主がいかなる人物なのか、造像経緯には不明な点が多く、解明はひきつづきの課題としたい。

また、清水隆慶の作例は今後も発見されることが予想される。院達との関係についても、作例を比較することで考察していきたい。

### おわりに

海生寺の廃絶後も、長らく地元の人々により守り伝えられてきた深山正虎像は、鎌倉彫刻の写実性を踏襲した、近世における肖像彫刻のありようを示す、すぐれた作例

として評価することができる。また、清水隆慶の幅広い制作活動、ひいては時代の求めに応じた近世仏師の制作活動を示す資料であるとともに、深山正虎に関する数少ない歴史的資料としても貴重である。

江戸時代はじめ、度重なる戦乱により荒廃した寺院の復興や整備が進むなか、仏師はそれにとまなう仏像や肖像等の修復・新造に従事する。そうしたなかで優れた近世彫刻作品も多く制作され、吉野右京もそれを担ったひとりである。この時代、清水隆慶はどのような活路を見出し、系譜をつないだのか。深山正虎坐像はその一端を知ることのできる、初代隆慶制作の頂相彫刻である。

### 註

- 1) 本書は、昭和50年(1975)から同52年にかけて、京都市内の肖像彫刻の総合調査を実施したその成果で、総計171点におよぶ肖像彫刻が収められている。調査員は清水善三氏(京都大学文学部助教授・当時)・宮島新一氏(京都国立博物館技官・当時)・若杉準治氏(京都府教育庁文化財保護課技師・当時)。
- 2) この一帯は、近世では太秦郷市川村とされ、その歴史については『史料 京都の歴史』第14巻 右京区(平凡社、平成6年)でふれられている。本像を所有する市川車僧保存会は、旧市川村住民の有志からなる。この地区は木嶋神社(蚕ノ社)の氏子地域であり、かつ春日神社の剣鉾を護持する。
- 3) 勝巖院現任職によると、『寺院明細帳』に見られる当時の住職・長積歎瑞氏は第19代の住

職（現在は第23代）であるが、海生寺については特に聞き伝えがないとのことだった。

- 4) 「車僧」の読み方については『京都府史蹟勝地調査会報告 第一冊』（京都府、大正8年）の記述、および『能楽大事典』（筑摩書房、平成24年）等に準拠し、「くるまぞう」としたが、「くるまそう」（『京羽二重』〈貞享2年／1685〉、『都名所図会』〈安永9年／1780〉、下中邦彦編・発行『京都市の地名』〈昭和54年第1版1刷〉など）とする文献もある。なお、地元では「くるまそうさん」または「くるまんさん」と呼ばれ、親しまれている。
- 5) 位牌については、『塵添搥囊鈔』は北条時頼の回国のころ、すでに存在したとしているが、『鹿苑院殿埋葬記』に応永15年（1408）に義満の位牌がつくられたという記事がたしかである。（『国史大辞典』平成7年第1版第8刷）、または「位牌は中世に禅宗とともに入ってきたもので、義堂周信の『空華日用工夫略集』1371年（応安4）12月30日条にも、位牌は宋から伝えられたもので、昔は日本になかったとの記述がある。」（吉川弘文館『日本民俗大辞典』平成11年1版）などとおることから、建武元年（1334）当初のものとは考えにくい。
- 6) 『雍州府志』「海生寺」項は、新修京都叢書刊行会編著『新修 京都叢書』第10巻（臨川書店、昭和51年再版）、313頁収載。「車僧深山正虎塔」項は同書798頁収載。  
 「海生寺」在太秦里南市川村開基僧不詳。本尊観音而曾深山和尚住之。此僧始不称名字又不知何許人。常乘破車在四衢辺道旁小竪随其所欲而推之輓之里人名曰破車。或語以七百歳事而自謂所歴試因茲又呼七百歳。謁南禅寺直翁侃大悟。則剃髮為僧号深山諱正虎。結菴于山階山中然後移此寺而遷化。則有遺像相伝此像村人自筑紫携来也。今黄檗派僧之守。  
 「車僧深山正虎塔」在太秦郷七村内市川村海生寺
- 7) 立川美彦編『訓読 雍州府志』（臨川書店、平成9年）参照
- 8) 新修京都叢書刊行会編著『新修 京都叢書』（臨

川書店、昭和51年再版）に収載される、おもな近世地誌類における「海生寺」項を下記にまとめた。『山城名勝志』、『山城名跡志』、『山城名跡巡行志』の読み下しは筆者による。『京羽二重』織留巻之五（『新修 京都叢書』第2巻、486頁）

「車僧塔」太秦の郷七村のうち市川村海生寺にあり。この僧名もしれず又いづくの人といふ事をしらず。つねに破車にのりて心のいたる所にゆく。これ故に民人やぶれ車と云う。また七百歳以前の事をみづからよく歴試す。これに依て七百歳とも名付ぬ。南禅寺の直翁にまみへて大悟し、剃髪し僧となれり。また山科山中に小庵をむすび住しが後この寺に帰りて遷化すと云々。

『山城名勝志』巻之十（宝永2年〈1705〉）（『新修 京都叢書』第13巻、518頁）

「海生寺」〔広隆寺南市川村に在り。本尊ならびに開基深山和尚像有り。世に車僧寺と謂う。〕海生寺は開山深山和尚行状に云わく、師名氏をいはず。また何れの許の人と云ふことを知らず。常に破車に乗て四衢の道に在り。道の傍の小竪（竪）、その欲する所に随いてこれを推しこれを輓く。里人これを名づけて破車と曰ふ。或いは語るに七百歳の事を以てす。しかも自ら歴試す。これに因りてまた七百歳と呼ぶ。鳥窠の風を慕いて一夏筑の筥崎の松樹の上に座禅す。夏了りて特に往て直翁侃に謁すと云々。後に祝（剃）髪して僧となる。諱は正虎、字は深山。菴を山階の山中に結ぶ。〔師、直翁智侃を嗣ぐ。侃、聖一國師を嗣ぐ。〕

『山州名跡志』巻之八（正徳元年〈1711〉）（『新修 京都叢書』第15巻、259頁）

「海生寺」太秦の南、市河村にあり。今は草庵、西向。宗旨、禅。開基、深山。深山の影堂、同所西向に在り。深山行状の記に曰く、師、名氏を称せず。また何れの許の人と云ふことを知らず。常に破車に乗て四衢の道に在り。道傍の小竪（竪）、その欲する所に随いて、これを推す。里人これを名づけて破車と曰ふ。或いは語るに七百歳の事を以てす。しかも自ら歴試す。これに因り

てまた七百歳と呼ぶ。鳥巢の風を慕ふ〔道林禪師なり〕。一夏筑の筥崎の松樹の上に座禪す。夏了りて特に往て直翁侃に謁す。侃問ふ、聞く汝今夏樹の上に禪を修すと。是なりや否や。師の曰く、是なり。侃の曰く、如何なるかこれ樹上の禪。師の曰く、上なり下なりと。時に楹上に蟻行いて上下す。侃指して曰く、這うもまたよく座禪すと。師これを頷く。侃便ち趕い出す。後に於て剃髪して僧となる。諱は正虎、字は深山。庵を山階の山中に結んで毎に光藏の塔に往来す。自ら時果を持して木像に供す。臨終の前十日に光藏に来て木像を礼辞し、訖て石無心に謂って曰く、端午の日を以て山に入り去らん。一衆を携へ来て我を送れと。期に臨みて石行かんと欲す。衆みな曰ふ風狂の言信すべからずと云て行かずして已む。石もまた行くこと遅し。師、三回門に出てこれを待つ。日已に中を過ぐ。乃の詈って言く、同門に出入する宿世の冤家なり。吾が物言に違いて来らざるのみと。便ち袈裟を披し、草鞋を着け、桂杖を拓し、特榻に座して怡然として化す。預して庵後に於て喪地を占めて自ら薪を積むこと龕の如し。石独り晡に及んで到る。已に座化するを見て速やかに人をして光藏の衆に告げて来らしめて即ち茶毘す。烟消し火滅して骨灰無し。師は誠に散聖の応化なるか。已上。

『山名城跡巡行志』第四(宝暦4年<1754>)  
 (『新修 京都叢書』第22巻, 403頁)

「海生寺」同村(前出市河<ママ>村)に在り。今草庵なり。西向。禅宗。開基深山。

深山の影堂同所にあり。世の人車僧と云う。常に破車に乗りその欲する所に随いてこれを推す。里人これを名づけて破車と曰う。語るに七百歳の事を以てす。これに因りまた七百歳と呼ぶ。

『都名所図会』巻四(安永9年<1780>)(『新修 京都叢書』第6巻, 428頁)

「海生寺」太秦の南竹林の中にあり。今は草庵にて開山深山禅師の像を安置す。木像にして三尺ばかり椅子に座し扠子を持つ。こ

の僧何れの姓の人といふ事を知らず。常に破れ車に乗して四衢を往来す。世の人呼びて車僧といふ。また七百歳の年歴の事を語る故に名を七百歳とも称すとん。

9)「太秦海生寺開山深山和尚行状」(『続群書類従』第九輯上, 巻第二二九<続群書類従完成会発行『続群書類従』昭和5年, 397頁>)

師不称名氏。又不知何州人。常乗破車。在四衢道。道傍小墅。随其所欲。推々輓々。里人名之破車。或語以七百歳事而曰自歴試。因茲亦七百歳焉。慕鳥巢之風。一夏坐禪於筑之筥崎松樹上。夏了特往謁直翁侃。侃問。聞汝今夏樹上修禪。是否。師云。是。侃云。如何是樹上禪。師云。上也下也。時楹上蟻行上下。侃指曰。這個亦能坐禪。師頷之。侃使趕出而後剃髮為僧。諱正虎。字深山。結庵于山階山中。每往来光藏之塔。自持時菓供木像矣。臨終之前十日來光藏。礼辞木像訖。謂固遊名無心曰。以端午日入山而逝。詣携一衆來医我矣。臨期。石欲行。衆咸曰。風狂之言不可信焉。終不行。故石亦行遲。氏三回出門待之。日三過巾。乃罵言。同門出入。宿世冤家。違吾約言不來耳。便披袈裟著草鞋。拈拄杖坐。持掲怡然而化。預於庵後占喪地。而自積薪如龕矣。石独及晡到。已見坐化。速令人告光藏。衆來即茶毘。烟消火滅。無骨灰矣。師誠散聖應化矣。師嗣直翁侃。侃嗣聖一國師。

10)『延宝伝灯録』(延宝6年<1678>)は、妙心寺派の僧・卍元師蛮が先述した伝記(仏書刊行会編『大日本仏教全書』第108冊 延宝伝灯録第一<名著普及会, 昭和54年>176頁)。読み下しは筆者による。

『延宝伝灯録』巻第十一

深山正虎禅師。その出る所を知らず。また名氏を称せず。常に破車に乗り四衢の道に遊ぶ。群兒推し輓き、その行く所に随う。よく七百年の事を語りて日。自ら歴覽す。俗に称して車僧と曰う。また七百歳と呼ぶ。一夏筑の筥崎に在り、松樹の上に坐禪す。夏畢りて直翁を見す。翁問う、今夏樹上に修禪すと是なりや否やと。師曰く、不敢と。翁曰く、如何なるかこれ樹上の禅

と。師曰く、上なり下なりと。時に行く蟻、面前の楹を上下す。翁指して曰く、這うもまたよく修禪すと。師点首す。翁便ち趣出す。後に剃度して僧となり、始めて今の名を称す。直翁の滅後は城西の海上寺に寓処す。また山階の山中に庵を結び、毎に光明藏院〔直翁塔所〕を往来す。時果を持して真前に供え、一日来たりて真に拝しおわんぬ。無心石公謂て曰く、我れ端午の日に行脚して去ると。一衆を携えて来たりて送り行え。心許諾す。師庵に帰りて自ら葬地を定め薪を積むこと龕の如し。期に至りて無心まきに行かんとす。衆みな曰く、風頗の言、信ずるに足らざるなりと。心また果たさず。師三四回門を出てこれを待つ。日已に中を過ぐ。師罵って曰く、同門に出入する宿世の冤家。なんすれぞ約に違わんやと。便ち袈裟を披し、艸鞋を著け、拄杖を横にして榻に憑みて化す。心晡に及びて独り到る。已に坐化するを見る。速やかに一衆に告げて法の如く荼毘す。薪尽きて火滅するも骨灰共に失せる。蓋し散聖の応化なり。

- 11) 『嵯峨行程』は、『近畿歴史記』延宝8年(1680)記に収載(新修京都叢書刊行会編著『新修 京都叢書』第12巻, 臨川書店, 昭和51年再版, 45頁)  
車僧ハ、南禅寺派下ノ僧ニテ、深山正虎ト号ス、常ニ小車ニ乗テ往来ス、世ニ称車僧、今太秦広隆寺南門ノ前、市川村海生寺ニ、塔并ニ木像アリ
- 12) 守撰。文政4年(1821)成立。本史料については石川登志雄氏・日種真子氏からご教示を得た。
- 13) 観世左近訂正著『車僧』(檜書店, 昭和60年)参照。
- 14) 平成26年10月30日実施。調査場所は車僧影堂, 調査者は藤岡穰・浅見龍介・李鎮榮・高志緑・鏡山智子・橋本遼太・浜野真由美・安井雅恵, 撮影者は岡田愛(敬称略)。
- 15) ファイバースコープ調査は平成27年9月17日, 京都国立博物館にて実施。エックス線CTスキャン調査は平成27年12月3日, 同館

にて実施。

- 16) 平成26年8月7日に実施した, 京都市文化財保護課による聞き取り調査によると, 車僧影堂は昭和40年代にも改築されている。
- 17) 杉山二郎「清水隆慶について」(大和文化研究会編・発行『大和文化研究』5巻5号, 昭和35年), 「清水隆慶遺聞」(東京国立博物館『MUSEUM』191号, 昭和42年), いずれも同著『日本彫刻史研究法』(東京美術, 平成3年)に再録  
歴代清水隆慶の生没年は以下の通り  
初代隆慶  
生没年: 万治2年—享保17年11月  
(1659—1732)  
戒名: 麟岡舎隆栄居士  
二代隆慶  
生没年: 享保14年—寛政7年  
(1729—1795)  
戒名: 孤巖隆恭居士  
三代隆慶  
生没年: 不詳—文化2年(1805)  
戒名: 観室隆円居士  
四代隆慶  
生没年: 不詳—安政4年(1857)  
戒名: 道空妙行信士  
なお, 初代と二代の血縁関係であるが, 二代隆慶は初代が71歳の時に生まれていること, また位牌の銘文「麟岡(初代隆慶)子ノ弟子主膳ニ習テ妙手ヲ究ム」[表31]とあることなどから, 杉山氏は父子の関係ではないと推測されている。
- 18) 註17ならびに, 切畑健「清水隆慶と「百人一衆」(日本美術工芸社『日本美術工芸』第323号, 昭和40年)に詳しい。
- 19) 浅湫毅「新出の清水隆慶作品 —近世彫刻の諸相4—」(京都国立博物館『学叢』第34号, 平成24年)。また, 猪飼祥夫「清水隆慶作「髑髏」の経穴」(同)では, 後述「髑髏」を解剖学的観点から考察している。
- 20) 註17
- 21) 註19
- 22) 新田義円「松林寺の不動三尊について」(大和文化研究会『大和文化研究』第10巻1号,

昭和40年)

- 23) 小林剛編『宝山湛海伝記史料集成』・『宝山湛海伝記史料集成 附函』（開祖湛海和尚第250回遠忌事務局，昭和39年）
- 24) 田邊三郎助「湛海律師の肖像と不動明王像」（『寶山湛海律師三百年遠忌記念 湛海律師の祈り』生駒山寶山寺，平成27年）
- 25) 註17「清水隆慶遺聞」
- 26) 松林寺護摩堂安置の木造不動明王坐像光背陰刻銘（註27から引用）「貞享二乙丑年八月日／当不動明王三尊予為持念奉造立令與院安座／於是太宮方末孫法橋院達者予旧友故一夏当山來住／令受八戒中尊予共彫刻二童子達全作也生年六十四／予五十七歳 宝山湛海」
- 27) 高橋平明「宝山湛海律師関係の仏像彫刻について」（追手門学院大学『Musa:博物館学芸員課程年報』8，平成6年）
- 28) 「閑観」は湛海筆『靈感記』で繰り返し用いられているが，新田氏によれば閑関と同意。閑関とは，「世務を絶ち室内に閉居して道業・惠業の成就に精進するもの」（『望月佛教大辞典 第10巻 補遺Ⅱ』世界聖典刊行協会，昭和38年）
- 29) 長谷洋一「吉野右京についての覚書」（『関西大学博物館紀要』12，平成18年）

## 謝辞

本像の調査・指定および本稿執筆にあたりご指導，ご協力，ご助言くださいました，市川車僧保存会会長・石田治様，藤岡穰先生はじめ諸学生の皆様，浅見龍介先生，根立研介先生，浅湫毅先生，井上一稔先生はじめ諸学生の皆様，井上幸治氏に，末筆ながら記して御礼を申し上げます。

やました えみ  
山下 絵美（文化財保護課 文化財保護技師（美術工芸品担当））

清水隆慶が関与すると推定される湛海作品および清水隆慶作品一覧

No.	作者	制作年 (西暦)	伝来	作品名	銘文・墨書等	推定年齢(歳) 隆慶	法量(cm)	品質・構造	所蔵<所在地>	備考	図版掲載	典拠	
1	初代隆慶	元禄2 (1689)	個人	髷像	箱底墨書「元禄第二己巳一刹千金陽天/花朝中句隆慶/作重文髷骨形/清水右近隆慶命(花押)」、箱蓋裏墨書「隆慶□□都所全/野文介□□可看/比叡山僧持手上/質尺見男婦人間/玉笔」	61	箱身長20.5	木造・彩色	個人<京都国立博物館>		ク	ク	
2	初代隆慶	不詳	京都・海生寺	木造深山正虎坐像	底版内面墨書「圓山虎形師造立二世安業/願主上月宗全/弘正相定朝二十六葉大仏師/清水右近隆慶」	不詳	61.7	寄木造・彩色・玉眼	市川車僧保存会<京都国立博物館>	京都市指定	本編	本編	
3	湛海・初代隆慶	元禄9 (1696)	華嚴宗元興寺(塔跡)	木造不動明王坐像	光背裏面墨書「奉新造大聖不動明王一尊二世之求願/于時元禄九丙子年七月十八日觀若當法山律師眼也/則本尊之図彩色等師指也其外御手伝云/作者京都大仏師清水隆慶遺料金子五兩三歩也/後代当坊可為本尊者也/東大寺上之坊/後雅大/春秋/廿八歳」	38	51.4	木造・彩色	奈良・元興寺(塔跡)	奈良市指定	オケ	オケウケ	
4	—	元禄9 (1696)	大阪・玉泉寺	木造不動明王坐像	像底銘「和嚴若當宝山法師彫刻之并/奉開眼多中院十之坊尊忍/令附与之者也/元禄九丙子年十一月廿八日」	38	55.4	木造・彩色	大阪・玉泉寺	大阪府指定	カケ	カケ	
5	—	元禄12 (1699)	京都・愛宕山威徳院	木造不動明王坐像	厨子背面朱書「和之馬殿殿若當宝山法師彫刻不/似一食而足不出山者廿有余年修十方杖滿摩十/度修八千杖不知幾許日而慈救即精細數不/能屈指也又妙因早者觀形突愛宕威徳院院/願久仰德響慕其巧指悉余之造賜不動尊因/山自彫刻之点眼之而充其望耳洛西比丘妙拜拜/元禄己卯之冬弘成道日」	41	2寸8分 厨子高9寸	木造・彩色	個人カ			ウ	ウオケ
6	—	元禄14 (1701)	和歌山・地藏寺	木造不動明王坐像	光背裏面銘「願主亮玉/生駒山宝山比丘自作自/、台座裏面銘「元禄十四年/十月吉日」	43	8.5	木造・彩色・観金	和歌山・地藏寺			カケ	
7	—	元禄14 (1701)	奈良・宝山寺	厨子入五大明王像	不動像裏墨書「即彫刻五大明王至/刻中等不識風節当/于時中思法爾開眼明王/不思識之神力也斯滿真/冥法身出現之尊体委可/貴可自由自手影彩功/畢余今歳七十有三修八万/杖一々度十方杖八千度/八千杖八千度一杖廿二ヶ/度調慈救祝八個五百/十方返余不具記/焉/元禄十四年己巳年十月十八日/宝山法師、厨子扉朱書「此五大尊以赤梅樹御衣木彫刻者也至刻中/央不動明王不慮有節自然成開眼目黒玉/法爾開神神明王不思識神力所為思/之可謂冥法身出現尊体委不可有/不/仰不可不費由是自手莊彩等功畢為後世信敬記録之者也/于時元禄十四年己巳年十月十八日/宝山法師七十三歳」	43	73	中尊5寸7分 厨子高6寸7分	木造・彩色	奈良・宝山寺開天堂	重要文化財	ウオ	ウオケ
8	—	元禄15 (1702)	奈良・法隆寺常観院	木造不動明王坐像	台座背面朱書「学部院空律師者密法相承/之親業而伝授三西野之三流空平生勤三密/之行業業願一万杖之應摩供捨節度依慈/願求予於不動明王之尊尊即等身之本/尊及二童子并二自作與之每年勤修而給願/度成就畢且又予春秋二箇度之拾方杖二万/杖之應摩供之助法捨三箇年之間一度不/欠又空再興密願院予感件之深志再手/作当尊并座光以合安置後院予吃願/明王加被而旨令得無上菩提互願願下/生之再會者也/元禄十五年四月二日/宝山法師七十四歳」	44	74	1尺8寸1分	木造・彩色	奈良・法隆寺西門堂		ウケ	ウオケ
9	—	元禄15 (1702)	大阪・大手寺	厨子入不動明王立像	厨子背面金泥書「和州生駒山般若堂宝山寺/中興持明大沙門宝山法師/和尚自彫刻開眼本尊也/元禄十五年五月三日」	44	1寸8分5厘(5.6) 厨子高3寸7分	木造・彩色	大阪・大手寺		ウ	ウオケ	
10	初代隆慶	宝永3-7 (1706-10)	個人	竹筒坐像	箱蓋表書「八九杖、付厨子與書「早今年七十餘日二とせのほるにむかひ八九の杖つき納め我がから輪めてたく/おもほゆれば若あやからしめたふも/またはこの巻八曲の筒口にと纏る/れは八曲九曲五老か狂歌年の数かれこれ/よせなぞへて題号を八九杖とことふく/而已 竹筒/宝永三戌正月廿日 好澄(花押)/栄竹老」	48-52	160	おもに木造・彩色	個人<京都国立博物館>		ク	ク	ク
11	—	宝永5 (1708)	奈良・宝山寺	厨子入不動明王半跏像 并二童子像	厨子背面金泥書「奉造建不動尊 宝山法師八十歳」	50	中尊1寸8分 厨子高1寸8分 不動明王像1尺3寸8分、聖眼像1尺9寸7分、地藏菩薩像1尺4寸1分	木造・彩色	奈良・宝山寺		ウ	ウケ	
12	—	宝永6 (1709)	奥山天皇持私堂本尊	木造不動明王立像 木造聖観音立像 木造地藏菩薩立像	不動明王像光背背面金泥書「大聖不動明王 宝山法師自作/宝永己丑歳十二月七日三尊開眼供養共畢、聖眼背面金泥書「正觀自在菩薩 宝山法師自作/宝永己丑歳十二月七日三尊開眼供養共畢、地藏菩薩像光背背面金泥書「地藏菩薩 宝山法師自作/宝永己丑歳十二月七日三尊開眼供養共畢」	51		木造・彩色	奈良・宝山寺		ウオ	ウオ	



No.	作者	制作年 (西暦)	伝来	作品名	教文・墨書等	推定年数(歳) 陽暦	法量 (cm)	品質・構造	所蔵〈所在地〉	備考	図版掲載	典拠
27	二代隆慶	安永7 (1778)	奈良・兜原寺	木造聖徳太子立像	親皇御鏡「恭奉以赤梅桐彫刻聖徳太子尊像一尊奉為「恒齊正因居士」幸正大 師菩提乃至法界平等利益」安置于南内吉野野阿彌聖徳山西方寺。開山大樹和 高代「安永七年戊戌七月／施主大坂内平野町／菅井門十郎／法名宗雲謹誌／本 朝弘元元相定朝廿八世／洛東見首門亭／清水隆慶」	50	1尺6寸	一木造 ・乗座仕上 ・鍍金	奈良・兜原寺		アエ	アエ
28	二代隆慶	安永7以降 (1778以降)	個人	木造富士見西行立像	箱蓋裏墨書「大仏師見首門亭／法橋清水立慶」	不詳	9寸2分	木造・彩色 ・玉眼	個人	木造聖徳太子立 像(平安時代後 期)の胎母。吉 祥天もおそらく 同作。	イエ	イエ
29	二代隆慶	不詳	京都・東福寺勝林寺	木造善師童子立像 (・木造吉祥天立像)	善師童子像台座裏墨書「本朝弘元元相定朝二十八世／洛東大仏師見首門亭／ 清水内匠・隆慶(花押)」	不詳	善師師 96.5 (吉祥天 104.4)	木造・彩色 ・玉眼	京都・東福寺勝林寺		コ	コ
30	二代隆慶	不詳	京都・東福寺勝林寺	木造吉祥天立像 木造善師童子立像	—	不詳	吉祥天 94 善師師 8.4	一木造 ・彩色	京都・東福寺勝林寺	上記聖徳太子立 像(平安時代後 期)の胎母。中尊 聖徳太子のう ち面師侍。	コ	コ
31	二代隆慶	寛政元 (1789)	京都・東福寺靈源院	木造龍泉和尚坐像	箱蓋裏墨書「天邊龍泉和尚之尊像／命于弘工清水隆慶／彫刻馬／寛政元 年己酉七月吉辰／前守塔／東堂齋法師孝／前守塔／西宮月城御師／感述」	61	35.5	木造	京都・東福寺靈源院		コ	コ
32	二代隆慶	不詳	個人	木造千利体立像	—	不詳	17.1	木造・彩色	個人〈京都国立博物館〉		ク	ク
33	二代隆慶	不詳	個人	二代隆慶位牌画像	牌面「孤願隆慶居士 靈」位牌裏墨書「元相定朝廿八世弘工見首門亭清水隆慶 初名梅松長二新歲中年ニテ内匠又隆慶ト改亭保十四西生寛政七卯十二月廿日寂 十三ニテ母二別二子父二不幸ス行ヲ斷同子ノ弟子主願ニ習子妙手ヲ究ム妙 有時ハ琴瑟曲調カニ二週ニテ人トアラソハズ幼童老若皆稱人二人ノ兄早 世シ一人ノ姉二人ノ妹ヲ有テ家ヲトホタルヲ起シ業■(繁カ)昌シ平生神仏ヲ イリテ成テ持齋ヲ勤終細線ヲヨム中年ノ比一石一草法華經ヲ書写シテ四年 ノ病中法花教部誦讀シ首題十萬遍今臘月廿日ノ晚臨終ノ時家子ヲ集メ覺悟ノ 一書此庵病氣ノカシ難シト書殊ヲ神院龍尼ヲトテ正念シテ往生スヲシムヘ シ此家ニ生ル者隆慶居士ヲ神仏トアケム尊ムヘシ居士自作ノ像并落髮落齒ト モ此當ニ納メ置者也／居士卒六十八才レトモ年内二節分有翌辰ノ年ニナラサレ ハ卯年ト定メ六十七歳ノ最」	不詳	像高 11.3 総高 46.8	木造	個人		イエク イエク	
34	三代 または 四代	不詳	個人	木造阿形金剛力士立像	板蓋裏墨書「大仏工職／清水法間隆慶ノ造」箱蓋裏墨書「清水隆慶彫刻」	不詳	7寸1分	木造・彩色 ・玉眼	個人	朱書は初代・二 代と異なる事々 せ	エ	エ
35	三代 または 四代	不詳	個人	木造羅漢坐像	背面墨書「四百十六ノ清水作ノ御嘆息、像底墨書「隆慶」	不詳	3寸6分5厘	一木造 ・漆塗	個人		エ	エ
36	四代隆慶	文化11 (1841)	奈良・長谷寺愛染堂	木造如意輪觀音坐像	台座裏墨書「文化十一年戊辰四月吉／京都建仁寺五条七ノ大仏工／清水隆慶ノ精 所ノ之右再興慶」	不詳	1尺5寸7分	寄木造 ・彫眼	奈良・長谷寺	隆慶が再興か	イエ	イエ

凡例

- ・本表は、おもに右記ア～ケの論考を参考に、清水隆慶の関与が推定される法像作品、ならびに清水隆慶作品 イ、杉山二郎「清水隆慶について」(同上「大和文化研究」第5巻5号、昭和35年)、同『日本彫刻史研究』(東京美術、平成3年)に再録をまとめたものである。
- ・No.は便宜上付したもので、制作順等を推定するものではない。
- ・旧字・異体字は通常の字体に改め、割書は〔 〕に示した。
- ・改行は／で示した。
- ・法量は像高を表記した。それ以外の場合は併せて部位を表記した。
- ・29・30は、平成21年6月15日実施の、京都市文化財保護課の調査による。
- ・31は根立研介先生のご教示を得た。
- ・伝来・所蔵、おもに各論考掲載当時の情報であり、現状と合致しない場合がある。

ア、杉山二郎「美原寺の聖徳太子像」(大和文化研究会編「大和文化研究」第4巻4号、昭和32年)

イ、杉山二郎「清水隆慶について」(同上「大和文化研究」第5巻5号、昭和35年)、同『日本彫刻史研究』(東京美術、平成3年)に再録

ウ、小林剛編『宝山法海伝記史料集成 附録』(開祖法海和尚第250回遠忌事務局、昭和39年)

エ、杉山二郎「清水隆慶遺聞」(東京国立博物館「MUSEUM」191号、昭和42年)、同『日本彫刻史研究』(東京美術、平成3年)に再録

オ、高橋平明「宝山法海律師関係の仏像彫刻について」(追手門学院大学「Musa 博物館芸芸員課程年報」平成6年)

カ、堺市博物館「特別展 仏を刻む―近世の祈りと造形―」平成9年

キ、高知県立美術館「近世土佐の美術」平成13年

ク、浅瀬敏「新山の清水隆慶作品 一近世彫刻の諸相4―」(京都国立博物館「学叢」第34号、平成24年)

ケ、田辺三郎助「法海律師の肖像と不動明王像」(生駒山寶山寺「寶山法海律師三百年御遠忌法年 法海律師の祈り」平成27年)

コ、その他